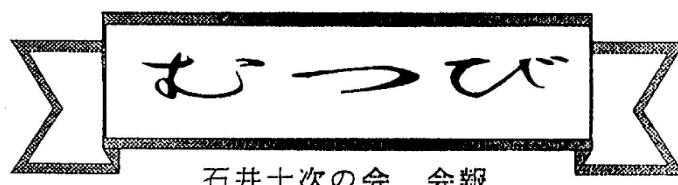


202 年
(令和 7 年)
3 月 13 日



330 号

社会起業家 石井十次と児嶋草次郎

福岡県立大学人間社会学部 佐野麻由子

社会起業家とは社会的企業の担い手を指し、社会的企業とは社会的課題に対処するための解決策を創造し、実行する組織を指します。この概念は、経済の低迷を背景にした大きな政府から小さな政府への転換を契機に、1980 年代後半から 90 年代に欧米で注目を集めるようになりました。日本では 2000 年代に入り、緊縮財政による公共サービスの新たな担い手への需要や阪神淡路大震災時の非営利法人の躍動によるボランティア活動の再評価、社会貢献を前面に出した企業の経営戦略への関心の高まり等を背景に頻繁に用いられるようになりました。

欧米や日本での議論をみると比較的新しい動向のような印象を受けますが、社会的企業の諸条件である (1) 社会的課題の解決という社会的使命を有する、(2) 社会的使命の達成のために、社会を変革するユニークな方法の提案や新しい価値観の普及に取り組む、(3) 持続的な活動のために活動資金を自己調達する、(4) 市民の参加を通じて経済の民主化に貢献する活動を重視する、と照らし合わせてみると、友愛社は、そのはしりと言えるのではないかと感じています。

友愛社は、ご存じのとおり、福祉が確立していない時代に孤児を救済し、彼らの自立を支援するという社会的使命をもち、自ら資金集めに奔走し、それまで日本になかった福祉

の礎を築きました。友愛社のホームページをみると、「明治 27 年、石井十次は独立自活を目指して、院内に種々の事業を試みるが失敗」とあり、石井は社会起業家としてすぐに頭角を現したわけではなかったようですが、孤児救済の支援を得るために日本国内だけでなく遠くはハワイ、アメリカ西海岸まで到達した音楽幻燈隊の興行は、大胆かつ新奇性に富むファンドレイジングの手法という点で社会起業家としての彼の才能を示しているといえるでしょう。

さて、時計の針を現代に戻し今日の友愛社に目をむけてみると、児嶋草次郎理事長も、石井の社会起業家の精神や才能を受け継いでいるように感じます。「『官僚主義的日本の福祉風土』の中で、私のささやかな抵抗は、強いたて割り志向の福祉に横穴をあけていくことでした¹⁾」という発言や「自らで資金を集めるという、それは失ってはいけない。だから、いざとなったらいつでも寄付募集をする、そういう気持ちが私にはあるんです。石井十次がやってきたことである²⁾」という発言には、福祉変革への強い思いや行動力がにじみ出ています。

昨年、開所を迎えた複合施設「友愛の森」は、「強いたて割り志向の福祉」に横穴をあけ、共生の地域づくりを目指し奔走している社会起業家・児嶋草次郎の記念碑的な一歩になったに違いありません。

児嶋理事長は次に何を始めるのでしょうか？友愛社から目が離せません。

¹⁾ ゆうあい通信 第二四三号より一部抜粋

²⁾ 『石井十次資料館研究紀要第 22 号』所集拙稿参照

正幸会文庫にて

石井十次の会宮崎支部副支部長 田村祥子



正幸会文庫で勉強する子どもたち

令和7年の年明けとともに子どもたちのひらがなのお稽古が始まりました。今年は、こひつじ園(宮崎市)の年長さん9名が、週2回、今までお昼寝していた時間に正幸会文庫でお勉強です。小学校に入学するまでにひらがなの読み書きができて、自分の名前が上手に書ける事を目標に少しずつ楽しく学習しています。

この正幸会文庫は、以前のむつびで紹介されていたように、柿原政一郎氏

の別宅があった場所に建てられています。柿原政一郎氏は、衆議院議員、宮崎市長、県会議員、高鍋町長などを歴任する政治家でしたが、石井十次に師事し、十次の意志を継ごうと考えて生きた社会活動家でもありました。そんな柿原氏が、終戦を高鍋で迎えていた児嶋琥一郎氏(現理事長の父)に、残された偉業を継ぐ事を奨め、昭和20年10月に石井記念友愛社が設立されたのです。これが現在の友愛社の原点です。その後、柿原氏は郷土の文教政策に貢献する目的で財団法人「正幸会」を立ち上げました。正幸会は、現在も図書館や近隣町村の文教政策のため寄付を続けています。戦後、柿原氏が高鍋図書館の館長を務めていた事や長年にわたり支援を続けてきた事から、2年前にリニューアルされた図書館は「柿原政一郎記念図書館」と命名されました。

柿原政一郎氏の事を知れば知るほど、その生き方、業績に感動すらおぼえます。その柿原氏を動かしていたものは石井十次の教えであり、無償の奉仕精神でした。たくさんの方々が、十次の教えに感銘を受け、生き方にも影響を受けていたのだと思います。

小さな文庫ですが、柿原政一郎氏やその後を継がれた長女の竹本哲子氏の想いがつまったこの場所で、子どもたちの学習のスタートのお手伝いを始めて8年目になります。最初に教えた子どもたちは、もう中学生です。きらきらした目で勉強は楽しいと言っていた子どもたち。今も夢に向かって頑張ってくれていると嬉しいです。知らなかった事を知る事、できなかった事ができるようになる事。学ぶ事は、とてもわくわくして楽しいものです。これから長い学校生活を送る子どもたちが「勉強は楽しい」と思ってスタートできればと思います。

私自身、石井十次はもちろんの事、それを支えた先人の生き方を学びながら、私ができることを続けていきたいと考えています。

石井 品子 ―慈愛と献身の生涯―

明治 28 年 9 月 12 日、石井品子は 31 歳の若さで、幼い 3 人の娘を残して永眠しました。長女友子は 5 歳、次女震子は 3 歳、三女基和子は生後 6 ヶ月。品子は過労と栄養不足が原因で結核にかかり、基和子を産んだあと別居して養生につとめました。回復することはありませんでした。

十次は 9 月 21 日の日記に自分の嘆きを書き残しました。

「亡妻を想ふ。大柱折れて全家將に覆らんとす。あ、寡言温順の彼がこの大事業に、いか計りの関係を有したりしやは今日に及んで益々顛はる。夕陽已でに没して四圍静寂、チンチロ蟲の声、暮色を透ほして予が鼓膜を打ち、坐るに亡妻を想ふて惜しむ、あ、予はいかにして可ならんか。」

品子が亡くなる 1 ヶ月前、十次はコレラに感染し、隔離病棟に収容され死線をさまよいました。品子は、自分が瀕死の床にありながら、十次が退院するまでは死ねないと頑張りました。十次日誌には次のように記しています。

「予の退院して彼を見るや、彼涙を流して曰く、『ヨーコソ帰って下さった、逆も今度は健全にしてご帰宅は六ヶ敷ものど覚悟し、せめて私なりとも生存せねば、それにまだ三児も小さいから死んでも死なぬと元気を出していました。しかし、最早あなたの顔を見た以上、私は死んでもかまいません』と。」十次は、品子の希望を容れ、品子をつり台にのせて孤児院に連れて帰りました。介抱 10 日余りののち、品子は年長女児や 3 人の我が子の顔を眺め、その名を呼んで笑みをうかべながら永遠の眠りにつきました。幼い子供を残していくことがどんなにか心残りだったことでしょう。

孤児院では「お母さん」と呼ばれ、孤児に慈愛を与え続け、十次に献身し尽くした生涯でした。十次の孤児救済事業は品子がいてはじめて出来たのでした。品子は表に出ることはありませんでしたが、岡山孤児院は品子が裏で支えていたのです。

(編集委員 石川 正樹)



方舟館からの お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★新会員のご紹介（敬称略）【大分県】米澤 菊恵

ここまでの掲載者は編集等の都合により 2 月 20 日までのものとしています。

★次回の通信発送作業は 4 月 9 日（水）10 日（木）いずれも 9 時からです。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。

〒 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会
石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●佐野麻由子様には、巻頭言に玉稿をいただき感謝申し上げます。社会起業家としての十次の志を受け継ぎ、官僚主義的福祉行政に横穴をあけようとする児嶋草次郎理事長の今後の活動に期待を寄せられています。共感すべき内容です。